２０１２年１２月２０日（木）読書会　　担当：飯島聡

橋川文三著『昭和維新試論（抜粋）』（１９７０年）レジュメ

（中島岳志編『橋川文三セレクション』岩波現代文庫　所収）

【はじめに】

「 ナショナリズムの水脈を探る――なぜ人はナショナリズムに走るのか？」という問題意識にて、今回の読書会をおこないます。今回の読書会によって、日本のナショナリズムを解剖するまでに至ることができるかどうか、わたしは自信はありません。ただひとつ言えることは、このテキストの読解を通じて、「渥美勝」という無名の一右翼人の生涯を俎上に載せ、日本の昭和期ナショナリズムに少しでも肉薄することができるのではないか、と淡い期待があるということです。

橋川は、「渥美勝」というナショナリストの内面世界や心象風景（それは、日露戦争後の青年の心に広がった不安と疎外感を素地とするものですが）を描き出すことによって、昭和期ナショナリズムの特異性を浮かび上がらせることに、ある一定程度成功したのではないか。同時に、日本のナショナリズムの”現代性”の一側面をも言い当てたのではないか。この現代性ゆえに、近頃増幅する日本のナショナリズムや排外主義への分析にも、このテキストは役立つのではないか。そう、わたしは考える。

＜現代日本社会に徘徊する内なる「渥美勝」を照射することで、わたし達の内面に巣食う「渥美勝」をあぶり出す＞。確かに、「内なる」云々という表現は言い古されたものであり、現代社会に生きるわたし達と「渥美勝」との半ば絶対的な距離も感じないわけではない。ただ、わたしは、ナショナリズムの外部からナショナリズムを指弾する意義を否定するつもりはないが、現代ナショナリズムに対して内在的な批評を加える作業も無意味ではないと考える。

【日本の昭和期ナショナリズムの現代性】

＜なにかを「奪われた」と感じる人々の憤りは、まだ治まっていない。静かに、そしてじわじわと、ナショナルな『気分』が広がっていく。それは必ずしも保守や右翼と呼ばれるものではない。日常生活のなかで感じる不安や不満が、行き場所を探してたどり着いた地平が、たまたま愛国という名の戦場であっただけだ。

ここでは敵の姿は明確である。韓国、メディア、そこへカネを貢ぐスポンサー、そしてこれらに融和する者。これらの者は日本人のためのテレビ番組を奪い、日本人の心を奪い、あげくに領土も富も奪いつくしているのだ。世の中の不条理は、すべてそこへ収斂される。その怒りの先頭を走るのが在特会だとすれば、その下に張り巡らされた広大な地下茎こそが、その「気分」ではないのか。

繰り返し述べたい。在特会は「生まれた」のではない。私たちが「産み落とした」のだ。＞

（安田浩一著『ネットと愛国　――在特会の「闇」を追いかけて』講談社　２０１２年　p.３１３）

※「在特会」＝「在特特権を許さない市民の会」

【日本の昭和期ナショナリズムの特徴的性格】

明治期のテロ（大久保利通、森有礼、星享など）と比べて、昭和期のテロにはその「動機に微妙な変化」（橋川）がみられる。

「いわゆる昭和維新の源流となる衝動の諸形態が萌芽状態としてあらわれるのは、およそ一九二〇年前後のことと考えてよいであろう。」（p.２０１）

朝日平吾　１８９０年（明治２３年）～１９２１年（大正１０年）
・朝日による安田善次郎暗殺事件（１９２１年）

「明治期における幾つもの政治的暗殺者をつき動かした志士仁人的捨身の意欲と、第一次大戦を画期とする資本主義の発達と貧富の階級分化がひきおこした経済的平準化への平民的欲求との結合形態が朝日の一身に認められるということである。」（p.２０５）

「(朝日平吾の不幸感は)、要するに継母故の家庭からの疎外、貧困と気質にもとづく学生生活からの疎外、馬賊隊参加と大陸放浪による日常的感受性の荒廃、その結果としてのあらゆる現実的企画の挫折といった諸要因によって醸成されたものであった。」（p.２０７）

「私がこうした朝日の不幸感の手がかりとして述べたいことは、朝日のパーソナリティに見られる傲慢とさえいえる要素と、その反面におけるむしろ病的というに近い懐疑・怨恨・挫折の感情との複合、葛藤の中から、近代日本人にとって、ある意味では未知というべき感受性が形成されたのではないかという推測である。」（p.２０８）

中島岳志著『朝日平吾の鬱屈』（筑摩書房　２００９年）より
「朝日は、・・・四年前の一九一七年に『憂国の青年は、美しい犠牲者となつて笑つて死地を踏まねばならぬ』と述べ、意志的な死を賞賛していた。そんな彼は、事業がことごとく八方塞がりとなるなか、存在を証明する手段を自らの死に見出すしかなくなっていた。朝日の希望は、もはやテロの実行という形しか残されていなかった。そして、それが彼にとって『自己であること』への執着の最後の表現だった。彼の意識は、自らの命を捨てることによって、自己であることを貫徹させるという転倒した方向へと傾斜していった。そのアイデンティティの欲望は、単なる自殺などでは決して満たされるものではなかった。それは朝日にとって、社会的な死でなければならなかった。その死が、最後の成功した事業計画とならなければ、彼の承認願望は充足されるべくもなかった。単なる自殺は、彼にとって許されないことだった。「希望はテロ」。朝日の表面的な要求は、格差解消のための経済的再分配であり、その主張は既得権益勢力に対する痛烈な批判であったが、その本質は、自己の実存的欲求にこそあった。――屈辱を味わうことなく、自尊心が満たされる生を送りたい。そのためには、社会的な死を選ばなければならない。それが、朝日の自己であることへの欲望の最終的な形であった。」（pp.１２７－１２８）

「多くの一般大衆がこの事件の頃に感じていたのは、経済が急速に悪化し、貧困問題が深刻化する中で、富の再配分を行おうとしない資本家たちへの苛立ち、閉塞感であった。そして、そのような「時代の空気」が、朝日の凶行に一定の理解を示し、彼の存在をヒーロー視する見方の拡大を生み出しのである。」（p１２７）

”代表的”昭和期ナショナリストとしての「渥美勝」の相貌を解き明かす。

【渥美勝＜１８７７年（明治１０年）～１９２８年（昭和３年）＞の位置づけ】

「後世の単純な左右両翼への二分法ではとらえられない本質が含まれていた」（p.２２１）

・巌頭之感（１９０３年　資料参照）⇒「煩悶青年」の登場

「自己同一化の対象の喪失から来る孤立感」（p.２２３）

「一般に明治三十年代の『日本主義』は未熟なままに世界の前にひらかれた『自我』意識が、自己をいわば夢想的・忖情的に偉大化しようとする衝動にみちびかれたものという気味がつよい。」（p. ２２５）

「渥美の心に生じた『煩悶』が果たして何であったかを確かめるすべはない。ただいえることは、ここでも渥美は、そうした激流の中で一個の有能な旗ふりになるには、己れが余りにも無力であることを痛切に感じたということであろう。」（p. ２３１）

・「高千穂行」１９２１年（大正１０年）の意味
「新たな信念の更生のための禊行とはいえ、ふつうにいえばやはり敗北者の都落ちというほかないであろう。」（p. ２３２）

【渥美勝の風貌】

「俗世のことにうとく、処世のことがらに拙ない上品な人柄といったものである。妙に頼りなげな育ちのよさとでもいうべきものがそこから感じとれるように思われる。」（p.２３５）

「それらの文章（渥美の遺稿「阿呆吉」など――引用者）を通して、私はかえって渥美自身がそのような意味での『乞食』（「吉っあん」――引用者）の一人であり、『阿呆』に近い処世上の無能力者であったことを思わないではいられない。渥美は『吉っあん』に自己の魂を投影しているのである。」（p.２３８）

【「桃太郎主義」「神輿かつぎ」が持った意味とは？】

「日本人の信仰において、その第一義諦の問題となるものは、『我等この生命で何を為そうか』というこ

とであり、その魂が救われるか、否かは問題にならないというのである。」（p.２４３）

「神輿かつぎ」の生き方
「この文章（『神輿』――引用者）は、渥美の思想と心情にはらまれた矛盾・葛藤を示すものとして興味あるものであろう。というのは、先に見たようなその生命観にもかかわらず、彼の現実の生活は必ずしもそのような生命観の燃焼として実現されることなく、むしろたえず彼を孤独な漂白者の感情へとひきこむようなものであったことを示しているともに、彼がその孤立感から『神輿』というシンボルにすがることのよって脱却しようとしていることを示しているからである。ここには二つの問題がある、一つは、彼の信仰観に見られる生々発展の理念は、彼の生命感情とそのままに結びついたものであったか、という疑念であり、もう一つは、その『桃太郎主義』とか『神輿かつぎ』という晴れがましい理念は、ついに彼の幻想的なユートピアではなかったのかという疑問である。」（p２４５）

【丸山眞男（「軍国支配者の精神形態」）と渥美勝との「おみこし観」の相違点】

「簡単にいえば、丸山の場合には、みこしもそれをかつぐ人間も、またその両者の関係も、いずれもグロテスクな原始的性格のものとして、つまり醜悪なものとしてとらえられているのに対し、渥美の場合には人の心をときめかせるような、アンガージュマンの美しさとしてそれは描かれている。前者はさめた冷静な散文の眼でみこしかつぎの陶酔を眺め、そのみこしかつぎがやがて小役人的な管理者たることもあるというところにまで、むしろシニックな観察を行きとどかせている。しかし渥美はむしろ陶酔と昂揚に同一化したい熱望をこめた詩人の眼でみこしを眺めている。・・・いいかえれば、渥美は天寵のシンボルとしてのみこしのカリスマに追随し、踊躍（ようやく）することに人間の本来の生き方があると信じ、そのような生き方をその沙漠のごとき放浪者の心理において祈念したわけであろう。」（pp.２４８－２４９）

「（しかしながら、）自ら『神の子』と信じようとした渥美は、ついには『阿呆吉』よりもむしろ救いのない境涯の下に『徹底して自己の無価値』を認めざるをえなかった。」（p.２５０）

【日本帝国主義が正統化される契機とは？】

「渥美が一高から京大に入り、やがて退学する時期は日清・日露の両戦役間に当っていたが、この時期の青年の思想・心情には、一種不思議な二重志向が認められた。いくらか概括的にいえば、それは世俗への志向と、自己＝自我への志向との分裂というべきものであった。世俗への志向はそれを大にしては帝国主義への関心であり、小にしては立身出世への関心である。」（p.２５１）

「渥美の日本主義、『桃太郎主義』もひろく見ればその同じ文脈で考えられるものである。『桃太郎主義』はその物語の筋からしても『帝国主義』『膨張主義』の色調をおびないわけではなく、そのイメージとしての『天真らんまん』『自由大胆に陽気に明るく』『がむしゃらなあばれんぼう』（藤井真澄）などという性格は、そのまま征服主義的発動の契機となりうるものであったが、渥美の場合に限っていえば、それ

はまた日本人のとしての人生認識という『内部生命』への沈潜という志向を多分にもつものであった。」（pp２５２―２５３）

「そこには、非常に素朴な形ではあるが、西欧帝国主義に対する微妙な憧れと反撥の思考様式が見られ、不安と期待というべき心情が浮かんでいる。日本はこのまま進んでいいのだという自負心と、否、このままではなく、まず日本人本然の姿をとらえてのちに、進むべきではないかというためらいとが共存しているようである。」（p.２５４）

【「維新願望の原型」としての渥美勝】

「渥美を知る人々の多くが証言しているように、昭和維新の願望をもっともナイーブに、鮮烈に印象づけた人物が渥美であったとするならば、それは『昭和維新』が、まさに二十世紀初頭、世界的潮流となっていた帝国主義に対する日本人の初心の精神的反応の中にその起源をもっているからであり、そして、渥美のほとんど思想とも行動ともならなかった生き方の中に、人々が自らの維新願望の原型をたえず回顧せしめられたからであろう。」（p.２５５）

渥美は、西欧から発せられる帝国主義に対して、初心では反撥を示しながらも、「自己＝自我への志向」を経由しつつ、やがては帝国主義そのものの正統化・内面化が図られる結果となった。これは、日露戦争後の多くの日本人にとっても同様のコースをたどったのではないかと、わたしは想像する。それだけに、渥美の人生行路をいま一度俯瞰することは無意味ではないと考える。

【以上】

※参考資料　巌頭之感（がんとうのかん）　１９０３年

⇒藤村操＜１８８６（明治１９年）－１９０３年（明治３６年）＞が遺書として残した「巌頭之感」の全文は以下の通り。

悠々たる哉天壌、
遼々たる哉古今、
五尺の小躯を以て此大をはからむとす、
ホレーショの哲學竟（つい）に何等のオーソリチィーを價するものぞ、
萬有の眞相は唯だ一言にして悉（しっ）す、曰く「不可解」。
我この恨を懐いて煩悶、終に死を決するに至る。
既に巌頭に立つに及んで、
胸中何等の不安あるなし。
始めて知る、
大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。